

Ⅱ - B - 8

鉍物生薬構成による抗癌中薬の補助薬としての漢方エキス剤の有用性について

佐賀県立病院好生館東洋医学診療部

○白水俱弘、矢山利彦、井上英介

〔はじめに〕克癌 7851 は劉兄弟が、本草綱目に緑青、鉄屑が癌に有効であることから作製し、1978 年 5 月 1 日から臨床に使用された方剤である。熱毒・お血といった副作用のため広く臨床には用いられなかったが、中日友好病院（北京）の周舒教授らは補助薬として漢方方剤（煎剤）を使用し、主薬である克癌 7851 の副作用を防止し安全な使用を可能とした。本研究は、日本において普及している漢方エキス剤が克癌 7851 の補助薬として有用であるかについて検討を行った。

〔対象と方法〕1991 年 3 月からの 92 年 2 月までの 1 年間に、胃癌、大腸癌、肝臓癌、そして乳癌などの術後再発症例を中心に 40 例に克癌 7851 の投与を行った。この中で予防投与症例や脱落症例などを除き、3 か月以上投与を行った 17 例について検討を行った。投与の方法は、主薬である克癌 7851 の 6～9 錠／日の分 3 食直後の服用と、食 2 時間後、補助薬として漢方エキス剤（ツムラ）の投与を行った。主薬は単独あるいは既存の制癌剤の中等量との併用とした。

〔結果〕補助薬として、清熱・解毒を目的に茵陳蒿湯 5 g と桂枝茯苓丸 5 g を合方し、さらに担癌患者の補気を考え補中益気湯 5 g を合方し、分 3 投与を原則とし、症例により多少の変方を行った。1 例に口苦などの熱症状を訴えたが、ほとんどの症例主薬に対する副作用は見られず、克癌 7851 の 6～12 錠の投与の補助薬として漢方エキス剤でも有用であると考えられた。

〔まとめ〕克癌 7851 は鉄と銅といった鉍物生薬で構成されているため熱、口苦、口内炎、舌炎などの症状を呈する。安全に使用するために補助薬として漢方エキス剤を使用し 17 例中 1 例に副作用を認めたが休薬期間を置くことによって継続が可能であった。漢方エキス剤は補助薬として有用であった。

（本研究に終始ご協力、ご助言いただき、また本方剤の提供をいただいた中日友好病院病理生理学教授周舒先生ならびに大学院生山本晃久氏に深謝いたします。）